

# カムチャツカ東南岸底曳網漁業試験

担当者 技師 村 上 圭 郎

## I 目 的

昨年度に引続きカムチャツカ東南岸海域における底魚資源の実態及び漁場環境等を更らに究明し、季節的消長、洄游移動の調査を行ない、底曳漁業の合理的開発方法を求め、底曳漁業の発展に寄与せんとするものである。

## II 調査の方法

1. 調 査 船 幸洋丸 (121.22T, 400PS)
2. 乗 組 員 船長以下19名
3. 調 査 期 間 昭和38年7月6日～7月31日
4. 調 査 海 域 北緯46度以北、北緯58度以南、東経170度以西の公海
5. 調査器具及び機械 昭和37年度沿海州沖合底曳網新漁場開発調査を参照
6. 漁 具 の 構 造 以東底曳網一式

## III 調査実施方法 前年度参照

## IV 調査経過

本年度調査に従事した海域は漁区番号07の55と44で調査は、水深250mから320mまでの間で行ない、7月16日から20日までの5日間で、1日平均曳網回数は5.2回、1曳網当り平均漁獲量551.2kgを示し、延曳網回数26回(うち曳網不能回数2回)で総漁獲量は13,230Kgであった。

魚種の組成はスケトウタラ59.4%、アラスカメヌケ22.3%、アブラカレイ7.4%、キチジ7.3%、ギンタラ3.6%の順位で漁獲され、それらの体長組成はスケトウタラでモード41～42cm(18%)分布範囲は37～57cmと各年級群が混獲されそのうち若令群が卓越している。又、アラスカメヌケの分布範囲は27～38cm(23%)、モード32～33cm(22.5%)にあり単峰型の分布が認められ、この傾向はキチジにも顕著に現われており、体長の分布範囲13～25cm、モードは18～19cm(20%)が認められている。昨年11月に実施した調査では主要魚種であるタラ、アサバカレイが、7月の当海域で全く認められず、それらに替ってアラスカメヌケ、キチジ、ギンタラが出現し、魚種の季節的消長が認められた。

第一次の航海に引続いて第二次に予定していたが昭和38年に発生した異常冷水の海洋調査及びサソメー観測等に従事したため第一次航海で打切った。

## V 調査結果

延投網回数 26回

曳網可能回数 24回

曳網不能回数 2回

総漁獲量 13,230Kg

一曳網当り平均漁獲量 551.2Kg

総水揚金額 520,270円

魚種別平均単価 (Kg当り)

アブラカレイ 29円23銭

キチジ 61円77銭

|         |             |
|---------|-------------|
| ギンタラ    | 4 8 円 5 4 銭 |
| アラスカメヌケ | 7 5 円 5 0 銭 |
| スケトウタラ  | 2 2 円 8 2 銭 |
|         | <hr/>       |
|         | 4 7 円 5 7 銭 |

## 水 揚 港 青 森 港

### Ⅶ 考 察

本年の調査した漁場の1曳網当り平均漁獲量は34年度に実施した7月のものに比較すれば107Kg少ない551.2Kgであったが当漁場の主要魚種であるアラスカメヌケが22.3%漁獲され魚価もKg当り75円50銭と高値であった。このことより7月の底曳漁業はアラスカメヌケを主体とすればかなり企業性の高いものと云えよう。漁場が遠隔であるため鮮度保持に留意すれば更に高値で上市出来るものと思われる。又独航で出漁する場合の積載量と企業採算の面を考えるなら現在の100トン前後の底曳船では小さいと思われるので適正な船型を考え底曳漁業の生産性の向上に努めねばならない。この調査に於いて好漁をした漁場の水深層は300m内外であり、海底の起伏状況は比較的勾配が緩やかで底質も砂、或いは砂泥質にして底曳漁場としては好適であるが、同一漁場での魚種の季節的消長を長期間続けて観察し洄游分布の状況を把握してゆきたいと思う。尚、又、主要魚種のアラスカメヌケは北緯52度周辺のカムチャッカ東南岸沖で産卵を終了後、北千島沖合の北緯49度周辺の岩礁地帯へ索餌のため洄游南下するようなので、底曳以外の底延縄、底刺網による漁具での漁場開発も今後興味ある問題であろう。

昭和38年度 漁場図

